



大決壊!
~田舎の元気娘と!~

☀ 目次 ☀

☀ 一 章 目 出 会 い は お も ら し か ら ！

☀ 二 章 目 一 緒 に お 風 呂 に 入 ろ う よ ！

☀ 三 章 目 一 緒 に 泳 ぎ に 行 こ う よ ！

☀ 四 章 目 一 緒 に 寝 よ う よ ！

☀ 五 章 目 お 腹 を 壊 し ち ゃ っ て 、 さ あ 大 変 ！

☀ 六 章 目 お 兄 ち ゃ ん に 喜 ん で 欲 し い ！

☀ 終 章 夏 が 過 ぎ て

🌀 一 章 目 出 会 い は お も ら し か ら ！

青々とした稲穂が風に波打ち、空を流れる雲はゆったりとしている。

日差しは強いけど、田んぼを撫でていく風は爽やかだった。

「凄いな、本当に田んぼしかねえ……」

間中真太郎は田んぼのあぜ道を歩きながら呟いた。

爽やかな風のおかげでほとんど汗をかくことはなかったけど、それでもどこまでも続くあぜ道は、それだけでごっそりとヒットポイントを削っていくものだ。

白の Y シャツに黒のズボンというどこにでもいるであろう日本の学生の格好をしているが、真太郎の他には同じ姿をしている生徒は一人もいない。

それどころか、田んぼを見回しても人影といったらカカシくらいしか見当たらなかった。

なぜ、真太郎はこんな田舎のあぜ道を歩いているのか？

——両親の都合で田舎の農村……川神村^{かわかみ}に引っ越してくることに決まったのは半月前ほど。

急な決定だったので、真太郎は転校先の学校を探すことになるも全寮制の学校はことごとく満室で、最後に残されたのが川神村にたった一つだけある学校……川神学園だった。

仕方がないので寮の部屋が開くまでの仮の措置ということで川神学園に通うことになったのだが……、

登校初日から、早くも心が折れそうだった。

家を出てからほとんど代わり映えもしない田んぼを歩き続けること三十分ほどが経過していた。

そのあいだ、原住民はおろか、同じ学校に通うであろう生徒たちともエンカウトしない。

もっともそれは転校初日から遅刻しないようにと早めに登校してきたからというものもあるのだろうけど……。

「なにはともあれ、どこか休めそうなところはないか……」

三十分以上も知らない道を歩き続けてきて、そろそろどこかで立ち止まって地図を確認したいところだ。

幸いなことにスマホの電波は届いているみたいだし。

「おや、あれは……？」

真太郎が目を細めたのは、左手に雑木林に覆われた小高い山が見えてきたときのこと。

そこに年季の入った石造りの鳥居があった。

鳥居の前で足を止めてその先を見上げてみると、苔むした石段が急角度で刻まれている。

木々がつくる影が濃く、緑の香りが吹き抜けてくる。

「鳥居があるっていうことは、この上は神社になってるのかな？」

幸いなことに、まだ登校するまでには時間がある。
せっかくだしお参りしていくのもいいだろう。
特に深く考えることなく急な石段を登っていくと――、

ぽーん、ぽーん、ぽーん……。

聞こえてきたのは、ボールをつく音。

どうやら境内には先客がいるらしい。邪魔しないように静かに石段を登っていき、やがて境内へと辿り着くと、そこは掃除が行き届いた静謐な空間だった。

そこにいたのは、たった一人の女の子。

「にじゅう……、にじゅういち……」

ぽーん、ぽーん、ぽーん……。

ただ無心に、スイカほどの大きさがあるピンクのゴムボールをついていた。

バスケットのようにドリブルをするわけでもなく、ひたすらに地面に打ち付けて返ってきたボールを、再び地面に打ち付けて――、
それでも女の子は実に真剣にボールをついている。

年の頃は……、最近の子供は成長が早いからよく分からないけど、身長 140 センチほど。

少年のように華奢な身体つき。

よほどのことがない限りは年下だろう。

亜麻色のサラリとした髪はショートカットに切り揃えられていて、もみあげの部分のところだけが胸元をくすぐるほどに長く伸ばされていた。

どんぐりのように大きくて瞳は、上下するボールを真剣に追っていて、そのたびにもみあげが揺れている。

セーラー服……いや、ワンピースだろうか？

丈の短いワンピースの余った布をキュッと腰の部分で結び、更に丈を短くして動きやすくしている。

そこから伸びる脚は黒タイツで覆われていて、健康的で子供らしい脚線美を一層強調していた。

「よんじゅうきゅー、ごじゅうっと……！」

ボールをついていた女の子はそこまで数えると、胸のところでピンクのボールを受け止める。

どうやら 50 回で打ち止めのようなのだ。

女の子は満足げに額の汗を拭くと――、

「……およ？」

こちらに気づいたのか、どんぐり眼を見開いて首をかしげてみせた。その仕草が、どこか小動物を思わせる。

(って言うかヤバいだろ、この状況は。小さな女の子と二人きりって、警戒されて当然……。早いところ逃げたほうが……)

少なくとも、ついこの前までいた都内の街では女の子に話しかけでもすれば下手したら通報されて『事案』になることだってある。

面倒なことにならないうちにさっさと U ターンして石段を降りなければ。

そんなことを考えていると。

「おはようございます！ お兄ちゃん！」

なんと女の子のほうから話しかけてきたではないか。無垢な笑みが朝日に眩しすぎる。

さすが田舎。

もう少し警戒したほうが良いと思うぞ。

いや、でもこういうときって確か不審者に対しては先に挨拶をして先手を取れと教えているとかいないとか……。

と、言うことは俺は不審者認定されているってということか!?

真太郎がこの場から U ターンしようか迷っていると、

「お兄ちゃん、このへんじゃ見ない顔だね。もしかして……今日転校してくる人って、お兄ちゃんのこと？」

「え、あ、ああ……。多分、そうだと思うけど」

小さな農村である川神村のことだ。

転校生がくるとなれば、それなりに噂になっているのだろう。

戸惑いながら頷くと、

「やっぱりそうなんだ！」

女の子はそれはそれは嬉しそうな笑みを浮かべてみせる。なにがそんなに嬉しいのか分からないけど、見ているこっちまで幸せな気持ちになってくる、そんな笑顔。

そんな女の子は、ピンクのボールを抱きながら言うのだった。

「あたしの名前は^{かんろ}甘露^{さくらこ}桜子！ よろしくね！」

「あ、ああ……。俺は^{まなかしんたろう}間中真太郎。よ、よろしく……」

「うん、お兄ちゃん！」

「お、お兄ちゃん……」

一人っ子だったから『お兄ちゃん』だなんて呼ばれるのが初めてで、なんだかむず痒い感じがする。

だけど桜子はそんなことお構いなしで、トテトテと駆けてくると右手を差し出してきた。

握手、したいのだろうか？

小さな手はモミジのように赤らんでいて、見るからに柔らかそうだ。

この手に触れた瞬間に突然アラームが鳴ってお巡りさんが駆けつけてきたりなんかしないだろうか。

一瞬だけ躊躇してしまおうけど、しかし子供相手に及び腰でいるわけにもいかない。

「今日からよろしくな」

「うん！　桜子って呼んでね！」

「い、いきなり名前プレイ……」

「名字よりも名前のほうが好きなの！　それじゃあお兄ちゃん、自己紹介も終わったことだし……一緒に遊ぼう！」

「ちょっ、学校は」

「まだ時間あるから大丈夫だよ。この神社の裏側、近道になってるしさ」

「そ、そうなのか……？　それじゃあ少しくらいゆっくりしても、いいかなあ……」

慣れないあぜ道を 30 分ほど歩いてきたり、苔むした石段を登ってきたりと、朝だというのに早くもお疲れモードだ。

木造の神社の庇のところがちょうど日陰になっているので、ちょっと失礼して階段のところに座らせてもらうことにする。

「あー、さすがにここまで登ってくると喉渴いたな。自販機は……なさそうだよなあ」

葉っぱ一枚も落ちていない境内はよく手入れが行き届いているけど、常夜灯の一本さえも見当たらない。

文明から何百年分くらいかは隔絶された空間のようだ。

「お兄ちゃん、お茶でよかったら飲む？」

「んん……？　わ、悪いな……って、ちょっ」

真太郎が言葉に詰まったのも無理はない。

桜子はすぐ隣になにも警戒することなく座ったのだ。思いも寄らない急接近に子供相手だというのにドキドキしてしまう。

桜子は脇に置いてあった水筒からコップ兼ふたへとトポトポとお茶を注ぐと、

「んく……っ、んく……っ」

まずは自分で飲んでからこちらへと差し出してきたではないか。

「あ、あの、桜子さん……!？」

「ぶー、なんでお兄ちゃんなのになんで桜子さん!? 桜子って呼び捨てにしてー！」

「そ、それじゃあ……桜子……」

「よくできました！ それじゃあご褒美にお茶飲んでいいよ！」

「あ、ありがとう……」

なし崩し的にお茶の入ったコップを受け取ってしまっただけ、これは間接キス待ったなしというやつでは？

いや、しかし……、

ここでお茶に口をつけずに返すというのも変だし。

(そう、そうだ……桜子はまだ子供じゃないか。だから変に意識するのがおかしいってのもんだ。ここは純粹な厚意に甘えてお茶を飲ませてもらうだけ――)

ごくん。

心は無心にしてコップに口をつけ、お茶を飲み下す。

よく冷えた緑茶だった。

口を、喉を、食道を潤して、冷たく心地いい水流が駆け巡っていきくと、火照った身体に染みていく。

「ぶはぁ……。染みる～」

ごく自然にそんな言葉が口をついて出ていた。

「いい飲みっぷりだね！　そしてそして……間接キス！　お兄ちゃんったら大胆なんだから」

「ぶふぉ！」

純真な笑顔でとんでもないことを言ってくれるもんだ。

危うく飲んだばかりの緑茶を嘔きだしてしまいそうになる。

「冗談だよー。そんなに怒らないの」

「大人をからかうんじゃないの！」

「およよ？　鬼ごっこかな？　あたし、足速いんだから！　捕まえられるもんなら捕まえてみて！」

勢いよく立ち上がった桜子は、軽やかに数歩ステップすると、くるりとターン。

そして挑発的な笑みを浮かべると、お尻を振ってみせる。ワンピースの裾で結ばれているお団子がふりふりと揺れた。

「鬼さんこちら！ 手の鳴るほうへ！」

どうやら初登校する前に、もうちょっとだけ運動することになりそうだ。

☆

だけどその鬼ごっこは長くは続かなかった。
パチパチと手を叩いていた桜子が、急に立ち止まってしまったのだ。

「どうした、もう鬼ごっこはお終いか？」

「うう～」

聞いてみるも、桜子は気まずそうに低く唸り声を上げるばかりで要領を得ない。

かと思ったら、なぜかそわそわとしだして、両手でおまたを押さえたではないか。

もしかして、これは……！

思いが至るまでに、桜子は実にハキハキとした声でいうのだった。

「おしっこ！ 漏れそう！」

「ちょっ、小便!? どこかにトイレとかないのかよ！」

慌てて周囲を見回して見るも、境内には神社と狛犬さんがいるばかりで他にはなにもない。

「ううっ、トイレはぁっ、学校まで行かないと、ないよぉ……！」

「そうか、それじゃあ急がないとなっ」

「うっ、ううう！ けど、もうっ……！」

「ピンチなのか!? もうヤバいのか!？」

「うん……！ もう手の力抜いただけで……あぁっ、漏れちゃってきてるよぉ……！」

「それじゃあその辺でするしか！」

「ダメだよっ。神社でおしっこなんかしたらバチ当たるんだもん！

おばあちゃんが言ってたんだもん！」

「そ、そうか……それじゃあ……学校まで我慢だっ」

「う、うん……！」

元気よく頷いて、数歩前に進みだした桜子だけど……、

尿意はかなり際どいところまできているようだ。黒タイツに覆われた脚はフラフラしていて、プリッと膨らみはじめたお尻はへっぴり腰になっていてセーラー服からはみ出しそうになっている。

子供の膀胱はまだ成長しきっていないから小さいのだろうが……、見るからにヤバそうだ。

そしてその予想が間違っていないことは、桜子が数歩進んだところでの的中することになる。

「あっ、あっ、あぁーっ！」

桜子が引き攣ったソプラノボイスをあげると、ただでさえ引けているお尻がキュッと更に引ける。

じゅもも！

ギュッと両手で押さえられているはずの桜子の股間から、くぐもった水音が聞こえてくる。いや、噴き出してきたといったほうが的を射ているだろうか？

その数秒後――、

ちょろ、ちょろろ……。

黒タイトの内股を、一筋のおしっこが流れ落ちていく。
どうやら少しずつだけどちびっているようだ。

「あっ、あうう！ 出ちゃう！ 漏れちゃうう～!!」

「頑張るんだっ。学校まで辿り着けたら思う存分おしっこができるんだぞ！」

「ああぁ……学校に着いたら……あっ、ああぁ……」

両手で前抑えしたまま、うわごとのように呟く桜子。
このリアクションは、もしや……？

「ちなみにここから学校まで何分くらいかかるんだ……？」

恐る恐る聞いてみると、

「うう～、ここからだ、あと 20 分くらい、だよぉ……！」

「な、なんだってー!？」

それほどの長大な道程に、桜子の尿道が耐えられるか？ それはおまたを抑えてお尻をキュッとつきだしている様子を見れば一目瞭然だった。それは桜子自身が一番良く分かっているのだろう。

じゅもも、じゅももももっ。

股間からくぐもった噴射音が聞こえ、

ちょろ、ちょろろ……、
ちょろろろろろろろろろ……。

黒タイツを伝い落ちるおしっここの筋はだんだら模様となって、黒タイツを黒よりも暗い黒へと染め上げていく。

太ももを染めたおしっこは、膝小僧の裏側をくすぐり、ついにはふにっとしたふくらはぎを伝い落ちている。

「が、がんばれ……！　がんばるんだ……！」

「う、ううう～！　も、もう……！」

ギュッと両手で前抑えして、よろよろと進み出すも……、しかしその小さな数歩で限界を迎えたようだ。

「あっ、あぁぁ～」

桜子はどこか気が抜けた吐息を漏らすと、フッと小さな身体から力が抜けていき――、

石畳にしゃがみこんでしまった。

ぺたんとお尻をついて、女の子座りで。

しょわわ、

しゅわわわわわわ……。。

桜子の股間からくぐもった水音が止まらない。

当然、ショーツもタイツも降ろすも叶わず……。、恥ずかしすぎるおもらしのはじまりだ。

「あっ！ あっ！ あっ！ おっ、おまたぁ……。っ、温かくなって……。あっ、やぁっ、お尻も……。ひっ、ひうう！」

しゅいieiieiieiieiieiiei……。。

しよおおおおおおおお……。。

おしっこを止めようとしているのだろう。

桜子は引き攣った声を漏らすも、ふっくらとした女の子の尿道は一度漏らしはじめてしまったら最後まで止めることはできない。

男のものとは比べものにならないほど太い尿道から、一気におしっこを噴き出しようにできているのだ。

「はぁぁぁ～～～……。」



しゅわわわわわわわわ〜〜〜。

桜子がどこか恍惚とした表情で吐息を漏らす。

すると心なしかおしっこの勢いが増したような気がして――、
ついに、石畳にぺたんとお尻をついている桜子を中心として、大きな水たまりが広がっていった。

女の子座りで漏らしているから、黒タイツがおしっこに侵食されてビタビタになっている。

その感触に尿道が更に緩んでしまったとでもいうのだろうか？

「あっ、ああぁ……ふぁああぁ……」

しゅいieiieiiei……。

尿道と同じくらい頬を緩ませて、桜子のおもらしは続く。

股間を押さえている両手……その指の隙間から、止めどなく生温かなおしっこの奔流が湧き出してきている。

この小さな身体のどこにこんなにもおしっこが溜まっていたのだろうか？ そんな疑問が浮かぶほどに、桜子を中心として石畳には大きな暗い湖ができあがっていた。

だけどそのおもらしも永遠には続かず――、

ぶるるっ！

じゅももっ！

「はっ、はふうう……っ」

桜子は熱っぽい吐息とともに切なげに身体を震わせると、小さな身体から大量のおもろしは唐突に終わりを告げた。

あとに残ったのは……。

「はぁぁ……。こんなに出ちゃったよぉ……。っ」

自らの失敗に身を沈め、桜子は涙目で呟く。

夏の草いきれに、ツーンとしたアンモニア臭が混じり合った。

これが女の子のおしっこの匂い――。

初めて味わう匂いに、なぜか目眩を覚えてしまう。同じ刺激的なアンモニア臭のはずなのに、どこか甘く感じられてしまうのは、こんなにも小さな女の子だということにフェロモンが混じっているせいなのだろうか？

アンモニア臭のなかにふんわりとしたフローラル系の香りが感じられ、目の前に広がっているのがおしっこだということを忘れてしまいそうになる。

もっとこの匂いを味わっておきたい――。

「……。っ、俺はなにを考えてるんだ！」

転校初日でいきなり目の前の女の子に手を出したりなんかしたら、それこそ大変なことになってしまう。田舎の情報網を舐めてはいけないのだ。

だけど、こんなときに一体どうすればいいのだろうか？

都会に住んでいるときにはこのくらいの年頃の女の子と話したことなんてなかったし、それにおもらししてしゃがみこんでしまっている……。

誰かがこの光景を見れば、あらぬ誤解を受けてしまいそうなシチュエーションではある。

(ここは見なかったことにして、さっさと学校に急ぐ……)

ほんの一瞬だけそんな薄情なことを考えてしまうけど、すぐに首を横に振って否定する。今にも泣き出しそうになっている女の子を前にして、そんなことできるはずがなかった。

「……た、立てそうか……？」

なんとか声をかけると、

「うう……、無理……だよお……。脚に力、入らない……」

一生懸命立とうとしているのだろうけど、濡れそぼった黒タイツに覆われた細脚は、プルプルと震えるばかりで立ち上がれそうにはない。

これでは手を引いて無理やりにでも立ち上がらせて引きずっていく……ということもできそうにはなかった。

こうなったら――。

「よし、それじゃあ俺がおんぶしてってやる。一緒に学校に行くか」

「でも、それじゃあお兄ちゃんのこと、汚しちゃうよ」

「そんな細かいこと気にするなって」

「うん……。ごめんなさい、お兄ちゃん」

桜子に背中を向けておんぶするように言うと、恥ずかしがりながらも、

「お兄ちゃんの背中、とっても広いね。おじいちゃんの背中みたいに広い。それに身体も固くて大人みたい」

「大人なんだっての……」

桜子が負ぶさってきたことを確かめると立ち上がる。

すると桜子の身体は思っていたよりも軽くて、簡単に立ち上がることができた。

背中に押しつけられている生温かい感触は……。桜子の股間なのだろう。ジットリと生温かいものが Y シャツに染みこんでくる。

これは今日は登校初日から換えの T シャツで過ごすことになりそうだ。それでも教師に理由を言えば分かってくれる……。ことを祈るばかりだ。

神社の脇に置いてあるカバンや桜子の水筒などを回収して歩き出そうとすると、

「境内の裏から、細い抜け道があるから……。そこから学校まで行けるの」

「分かった。それじゃあしっかり捕まってるよ」

「うん！」

「……うおお!？」

ギュッと背中に抱きついてきた桜子の感触に、真太郎は思わず呻き声を漏らしてしまった。

てっきりまだまだ子供だと思っていたのに――、

胸のところにはポッチリとした確かな感触が感じられたのだ。レーズンのような、グミのような、柔らかくも張りがある二つの感触。

それは桜子の成長中の乳首に違いないのだろう。そして恐らくは、というか間違いなくノーブラ。

ハッキリとした感触が、なんの躊躇いもなくむぎゅっと背中に押しつけられてくる。

それだけじゃない。

「……んっ、ふう……っ」

桜子の妙に熱っぽい吐息が、首筋に吹きかけられた。

桜子には自覚はまったくないのだろうが……、それは充分に色っぽくて、男を戸惑わせるのに十分な破壊力を持っていた。

そんな桜子は言うのだった。

「なんか最近おっぱいが痛痒いの……。でも、なんかお兄ちゃんの背中に押しつけてると、安心できる……。なんでだろ」

「さ、さあ、なんでだろうな」

桜子の吐息を鉄の意志で堪えながら、真太郎は先を急ぐことにした。

案内されたとおりに境内の裏側に回ると、獣道のような草木を踏み固めただけの道が続いている。

足元を気にしながら歩いていると、不安になった桜子が、ギュッと脚を身体に巻き付けてきた。

温かくもふっくらとしたおまたが、なんの躊躇いもなく背中に押しつけられる。

(ヤバイ……って、俺はなんでこんな小さな女の子に戸惑ってるんだよ……！ 俺は断じてロリコンではない……！)

なんども『俺はロリコンではない』と心の中で呟きながらも獣道を進んでいくと、やがて視界を遮る木々がまばらになってきて、やがて木造の二階建ての建物が見えてきた。

「あれが学校だよ。裏の校門にから入れると思うの」

「なるほど。学校の裏に出るのか。これはいいショートカットを見つけたな」

「桜子とお兄ちゃんだけの秘密だねっ」

「俺だけ……えっ？」

桜子の言葉に引っかかりを覚えるけど、学校はもうすぐそこだ。

真太郎は歩を早めると、周りに誰もいないことを確認してから裏門をくぐった。

もしもおもらしした桜子を見つかりでもしたら、桜子が怒られて

しまうかも知れない。それに更にはあらぬ誤解を受けて真太郎までも転校初日から社会的に抹殺……と言うことも。

「さて、まずは漏らしたぽんつをどうにかしないと、だな」

「うん……このままだとおばあちゃんに怒られちゃうよ……」

「おばあちゃん……？」

「うん。あたしのお父さんとお母さんは都会に働きに行ってるの。だから、あたしはおばあちゃんの家で暮らしてるんだよ」

「そうなのか……」

さっきから時々おばあちゃんと口走っていたのはそういうことだったのか。

この年で両親と離れて暮らすのは寂しいことだろう。

……と言っても、俺自身がその大きな穴を埋めてやることなどできるはずもないのだろうけど。

「おっ、いいところに水道あるな。ここでパパッとぽんつとタイツ、洗っちゃうか」

「うん……」

学校の裏門からちょっと進んだところに、いい感じの洗い場があった。

水を飲んだり足を洗ったりするために作られたのだろう。

洗い場の前でおんぶしていた桜子を降ろしてやると、ちょっとだけよろめくものなんとか立ってくれた。

どうやら抜けてしまった腰は復活してくれたようだ。

桜子は赤い靴を脱ぐと、よたよたと黒タイツとショーツを降ろして行く。

おしっこで濡れた黒タイツは、見るからに脱げにくそうだ。

「なぁ、なんで夏なのに黒タイツなんて穿いてるんだよ。暑くないのか？」

「これはぁ、虫に刺されないために穿いてるの。ちょっとくらい暑くても我慢してるんだから」

「そ、そうなのか……」

確かにさっきみたいに神社で遊んでいれば虫に刺されてしまうこともあるだろう。

妙な感じで納得していると、

「って、おわわ!? おまっ、なんで裸!？」

「え? だって全部脱ぎ脱ぎしないと。服もちょっとだけ濡れちゃったから、洗っておきたいし」

「お、おう」

桜子は、なんの躊躇いもなくタイツとショーツ、更にはワンピースを脱ぐと一糸まとわぬ裸体になってみせたのだ。

やはりというか、ブラはまだなようだ。

ポッチリとした赤い乳首は、虫刺されのように歪に膨らんでいた。

視線を下にずらしていくとそこには、
つるん、

とした産毛さえも生えていない縦筋が、シュッと刻まれていた。正真正銘な、まだ性的なことを知らない『おまた』というにふさわしい割れ目。

そこはツーンとしたおしっこの香りを漂わせている。

「は、早いところ綺麗にしてやらないとなっ」

「えっ、大丈夫だよっ。自分で洗うからっ」

「子供なんだから遠慮しないのっ」

半ば奪い取るようにしてショーツとタイツを洗い始める。

そうしていないと、この無垢なおまたに視線を吸い寄せられるがまま、なにか間違いを起こしてしまいそうな気がするから。

「女の子のぱんつって、柔らかいんだなー」

ゴムでくしゅくしゅになってるショーツは男物とは違って手触りがなめらかだし、それによく伸びる。……戻らなくなったら大変だからやらないけど。

桜子が穿いていた白のこっとなショーツは、おしっこで鮮やかなレモン色に染め上げられていた。

幸いなことに、水道の蛇口にはレモンの香りがする石けんがぶら下がっていたから、そいつで泡立てて洗っていく。黒タイツも同じように洗ってやって、これで天日で乾かしておけばおもらしした証拠は綺麗さっぱりおもらしショーツとともに消えてくれるはずだ。

「よし、これでギュギュッと絞って……あとは乾かしておけば一時間くらいで穿けるようになるはずだ」

「ありがと、お兄ちゃん。これでなんとか先生に怒られなくて済んだよ」

スッポンポンで嬉しそうに言う桜子。

どうやら裸を見られたら恥ずかしいという感情は、まだ芽生えてはいないらしい。

当然のようにツルツルのおまたを遺憾なく白日の下に晒している。

このままでは目のやり場に困ってしまうので、おしっこがついてしまったワンピースの裾も洗うことにする。

ここはおしっこがちょっとだけついただけだったので、石けんの泡で軽く洗ってやれば綺麗になってくれた。

「ほい、ワンピース、綺麗になったぞ。とりあえずはノーパンだけどこれだけは着ててくれよ」

「えー、涼しくて良かったのにー。そうだ、お兄ちゃんも一緒に裸になろうよ。そうすればお揃い！　ぺあるっく！」

「それは随分レベルが高いペアルックですね」

思わず敬語になってしまった真太郎だけど、ここはワンピースを渡して、しっかりと着てもらうことにする。

「うーん、おまたがスースーして落ち着かない……」

「一時間くらいで乾くと思うけど、どこか適当なところに干すところは……」

「それならあそこの檜の木がいいと思う！」

「……ちょっと枝の位置が高くないか？」

「こんなの簡単に登れるよ！ よいしょー」

檜の木に駆けていった桜子は、小さな木のうろに手をかけ足をかけ、楽々と登っていく。

あっという間に自分の身長のおよそ三倍くらいは登ってみせた。

かなりの野生児……なのはいいのだけど。

ノーパンで構わずに登っていくものだから、プリッとしたお尻とおまたが丸見えになっていた。

桜子が気にしていないのだから、ここは鋼の意思でスルーしたいところだが。

「お兄ちゃん、パンツとタイツ、ちょーだい」

「お、おう」

木の上で手を伸ばしている桜子へと濡れた下着を渡すと、木の枝に引っかけていく。

風通しも日当たりも申し分ない一等地に、真っ白なショーツがはためいている。

これならカラッカラに乾いてくれることだろう。

「よいしょー、とんっ！」

桜子はかけ声とともにジャンプ！
たーんと地面が軽く揺れると、上手く着地を決めてみせる。

「えへへー、大ジャンプ成功～！」

誇らしげに胸を張る桜子。

あー、確かに高いところからジャンプが上手くいくといい気分だよなー、なんてことを思いだす。

それはもうずっと子供のころに忘れていた幼心。

久しぶりに味わう感情に思いを馳せていると――、

「おおよ？」

しかしなぜか桜子は不思議そうに首をかしげてみせる。

一体なぜ？

桜子はどんぐり眼な瞳を寄り目にして、実に興味津々といった感じで一点を見つめていて……、

具体的に言うと、それは俺の股間――。

「って、ちょっ」

真太郎は慌てて自らの股間を押さえる。だけどそれは両手では隠せないくらいに大きく膨らんでいた。

そう……、

真太郎の股間は、ズボンをテントのように膨らませて勃起していたのだ。

子供とはいえツーンとしたアンモニア臭を感じておもらしショーツを洗って、しかもツルツルのパイパンを見せられたのだ。

ロリコンでなくても立ってしまうのは仕方がないこと……だと思いたかった。

「ねえねえ、お兄ちゃんのおちんちん、なんでこんなに大きくなってるの!？」

「そ、それは……っ」

どうする!？

ここで嘘を教えることは簡単だ。

だけどきっと桜子は、その嘘をなんの躊躇いもなく信じることだろう。

ここは遠回しにでも嘘はつかずに……、

「あー、そうだ、男の人は、ドキドキするとおちんちんが大きくなるんだぞお！」

「へー、そうなんだ！ でもなんでドキドキしてるの!？」

「そ、それは……っ、桜子が可愛いからだよ」

「んもうっ、お兄ちゃんったら、急になに言ってるのかなぁ！ 恥ずかしいじゃん！」

バシバシバシ！

よほど恥ずかしいのか、桜子は勢いよく背中を叩いてくる。

小さな手のひらから繰り出される打撃は、野生児特有のたくましさがあった。

だけどこれで俺の股間から意識を引き離すことができたはず。
……と、思ったのも束の間。

「おちんちん見せてよ！」

「えっ、コラッ、ダメだって！」

「えー、なんで？ あたしのおまたもいっぱい見ていいからさー」

「そういう問題じゃないのっ。ほら、もう服も綺麗になったし、早くしないと遅刻するぞ！」

このままここにいと、桜子にズボンを下ろされて露出プレイをさせられてしまうに違いない。

真太郎は近くに置いてあったカバンを拾い上げると、さっさと靴を脱いで校舎へと逃げ込んでいた。

上履きがないからどこか適当なところで来客用のスリッパを手に入れたほうがいいだろう。そうなると職員用の玄関か。

真太郎は見当をつけるとさっさと木造の廊下を進んでいく。

だけど上履きに履きかえないといけない……と思い込んでいる桜子のご丁寧なことに昇降口があるだろう方へとダッシュしていて、それはどうやら表側にあるから結構な遠回りになるらしい。

「よし、撒^まけたな」

もうすぐ登校時間だ。

そうすればたくさんの生徒たちでこの学校もごった返すに違いない。

その中でまさか『チンチンを見せて！』だなんて突撃されるはずがない。

とりあえず当面の安全は確保できたわけだ。

……………。

……………。

……………。

『そう思っていた時代が、僕にもありました……………』

❁ 体験版はここまでです！ ❁

ここまで読んでくれてありがとうございました！

